

五十川遺跡 10

—第 27 次調査報告—



調査略号：GJK- 27

調査番号：2220

2024

福岡市教育委員会

序

古くから大陸との文化交流の玄関口であった福岡市には、数多くの文化財が残されています。その中でも福岡平野は福岡の歴史を考える上で重要な遺跡が数多く残されています。これらの文化財を保護し、後世に伝えることは本市に課せられた責務であります。しかし、近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあるのも事実です。福岡市ではそのような開発によってやむを得ず失われていく遺跡について事前に発掘調査を行い記録保存に努めています。

本書は、戸建住宅建設に伴う五十川遺跡第27次発掘調査について報告するものです。この調査では、弥生時代から中世にかけての集落を確認することができました。これらは五十川遺跡の解明のためにも重要な資料となるものです。今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後に事業主様をはじめとする多くの関係者の方々には、発掘調査から報告書刊行に至るまで、ご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和6年3月22日
福岡市教育委員会
教育長 石橋 正信

例言

1. 本書は、福岡市南区五十川二丁目289番6の一部における戸建住宅建設に先立ち、福岡市教育委員会が令和4年8月15日から令和4年9月27日にかけて発掘調査を実施した五十川遺跡第27次発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は上記の主体により行われ、調査は福岡市埋蔵文化財課の山本晃平が担当した。
3. 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4. 本書に掲載した遺構の実測図作成は、山本が行った。
5. 本書に掲載した遺物の実測図作成は山崎賀代子が行った。
6. 本書に掲載した遺構と遺物の写真撮影は山本が行った。
7. 本書に掲載した挿図の製図は山本が行った。
8. 本書で用いた方位は座標北である。
9. 本書で用いた座標は世界測地系による。
10. 調査で検出した遺構については通し番号を付している。
11. 本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管され、活用されていく予定である。
12. 本書の執筆・編集は山本が行った。

五十川遺跡第27次発掘調査基本情報

遺跡名	五十川遺跡	調査回数	第27次	遺跡略号	GJK-27
調査番号	2220	分布地図幅名	24	遺跡登録番号	0088
申請地面積	373.28㎡	調査対象面積	170.3㎡	調査面積	150㎡
調査期間	令和4年8月15日～令和4年9月27日			事前審査番号	2022-2-255
調査地	福岡市南区五十川二丁目289番6の一部				

本文目次

第1章	はじめに	1
1	調査に至る経緯	1
2	調査の組織	1
3	遺跡の位置と環境	3
第2章	調査の記録	7
1	調査の概要	7
2	遺構と遺物	7
(1)	掘立柱建物01	7
(2)	井戸026	7
(3)	その他遺構出土遺物	14
第3章	まとめ	14

挿図目次

第1図	五十川遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)	2
第2図	五十川遺跡調査地点配置図 (1/4,000)	4
第3図	五十川遺跡第27次調査地点配置図 (1/250)	5
第4図	五十川遺跡第27次調査調査地点 全体図 (1/100)	6
第5図	掘立柱建物01実測図 (1/40)	8
第6図	掘立柱建物01出土遺物実測図 (1/3)	9
第7図	井戸026実測図 (1/60)	9
第8図	井戸026A-A' 土層断面図 (1/40)	10
第9図	井戸026B-B' 土層断面図 (1/40)	10
第10図	井戸026C-C' 土層断面図 (1/40)	11
第11図	井戸026D-D' 土層断面図 (1/40)	11
第12図	井戸026井筒石材出土状況実測図 (1/20)	12
第13図	井戸026出土遺物実測図 (1/3)	12
第14図	その他遺構出土遺物実測図 (1/3)	14

図版目次

- PL 1 1. I区全景（西から）
2. II区全景（西から）
- PL 2 1. 掘立柱建物・井戸検出状況（南西から）
2. 掘立柱建物01全景（東から）
3. 柱穴031断面（南から）
- PL 3 1. 柱穴034断面（南から）
2. 柱穴035断面（北から）
3. 柱穴036断面（北から）
- PL 4 1. 柱穴031完掘（西から）
2. 柱穴034完掘（北から）
3. 柱穴035完掘（北から）
- PL 5 1. 柱穴036完掘（北から）
2. 井戸026全景（南から）
3. 井戸026全景（南西から）
- PL 6 1. 井戸026 井筒（南西から）
2. 井戸026 井筒石材検出状況（南から）
3. 井戸026 A-A' 土層断面（東から）
- PL 7 1. 井戸026 B-B' 土層断面（南から）
2. 井戸026 C-C' 土層断面（北西から）
3. 井戸026 D-D' 土層断面（北から）
- PL 8 1. 弥生土器壺底部（第6図1）
2. 弥生土器甕底部（第6図2）
3. 円盤状土製品（第6図3）
4. 土師器坏（第13図4）
5. 土師器大皿（第13図5）
6. 土師質の鉢（第13図6）
- PL 9 1. 土師質の鉢（第13図7）
2. 土師質の播鉢（第13図8）
3. 須恵器坏蓋（第13図9）
4. 須恵器坏蓋（第13図10）
5. 須恵器坏蓋（第13図11）
6. 青磁碗（第13図12）
- PL 10 1. 土師器坏（第13図13）
2. 土師質の鍋（第13図14）
3. 土師器坏（第14図15）
4. 土師質の播鉢（第14図16）

第1章 はじめに

1 調査に至る経緯

令和4年6月17日付に福岡市南区五十川二丁目289番6の一部の戸建住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無の照会文書が福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課に提出された。照会地は周知の埋蔵文化財包蔵地である五十川遺跡に所在し、周辺の確認調査・発掘調査から遺跡の存在が確認されている。また照会地では令和4年5月11日に確認調査を行っている。その結果、地表面から50cm～70cm下で柱穴等の遺構と遺物を確認した。これらから埋蔵文化財課では、遺跡保全に関して申請者と協議を行った。

その結果、戸建住宅建設において埋蔵文化財への影響が回避できないことから、記録保存のために発掘調査を実施することで合意した。そして令和4年8月5日付で個人を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、同年8月15日から発掘調査を行い、9月27日に終了した。

2 調査の組織

調査委託：個人

調査主体：福岡市教育委員会（発掘調査：令和4年度、整理報告：令和5年度）

調査総括：経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課

課長 菅波正人（令和4・5年度）
調査第1係長 本田浩二郎（令和4・5年度）

調査庶務：経済観光文化局文化財活用部文化財活用課

管理調整係長 石川あゆ子（令和4・5年度）
内藤愛（令和4・5年度）

事前審査：経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課

事前審査係長 田上勇一郎（令和4・5年度）
文化財主事 神啓崇（令和4年度）
三浦萌（令和5年度）

調査・整理担当：同課

山本晃平



- | | | | | |
|-----------|-----------|----------|------------|-----------|
| 1 五十川遺跡 | 2 那珂遺跡群 | 3 比恵遺跡群 | 4 山王遺跡 | 5 東那珂遺跡 |
| 6 那珂君休遺跡 | 7 板付遺跡 | 8 高畑遺跡 | 9 諸岡A遺跡 | 10 諸岡B遺跡 |
| 11 雀居遺跡 | 12 下月隈D遺跡 | 13 上牟田遺跡 | 14 席田平尾遺跡 | 15 久保園遺跡 |
| 16 席田大谷遺跡 | 17 宝満尾遺跡 | 18 狐塚遺跡 | 19 下月隈C遺跡 | 20 立花寺B遺跡 |
| 21 井相田D遺跡 | 22 井相田C遺跡 | 23 麦野A遺跡 | 24 麦野B遺跡 | 25 三筑遺跡 |
| 26 笹原遺跡 | 27 井尻B遺跡 | 28 井尻C遺跡 | 29 横手遺跡 | 30 三宅C遺跡 |
| 31 大橋E遺跡 | 32 三宅B遺跡 | 33 三宅遺跡群 | 34 和田田蔵池遺跡 | 35 野間B遺跡 |

第1図 五十川遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)

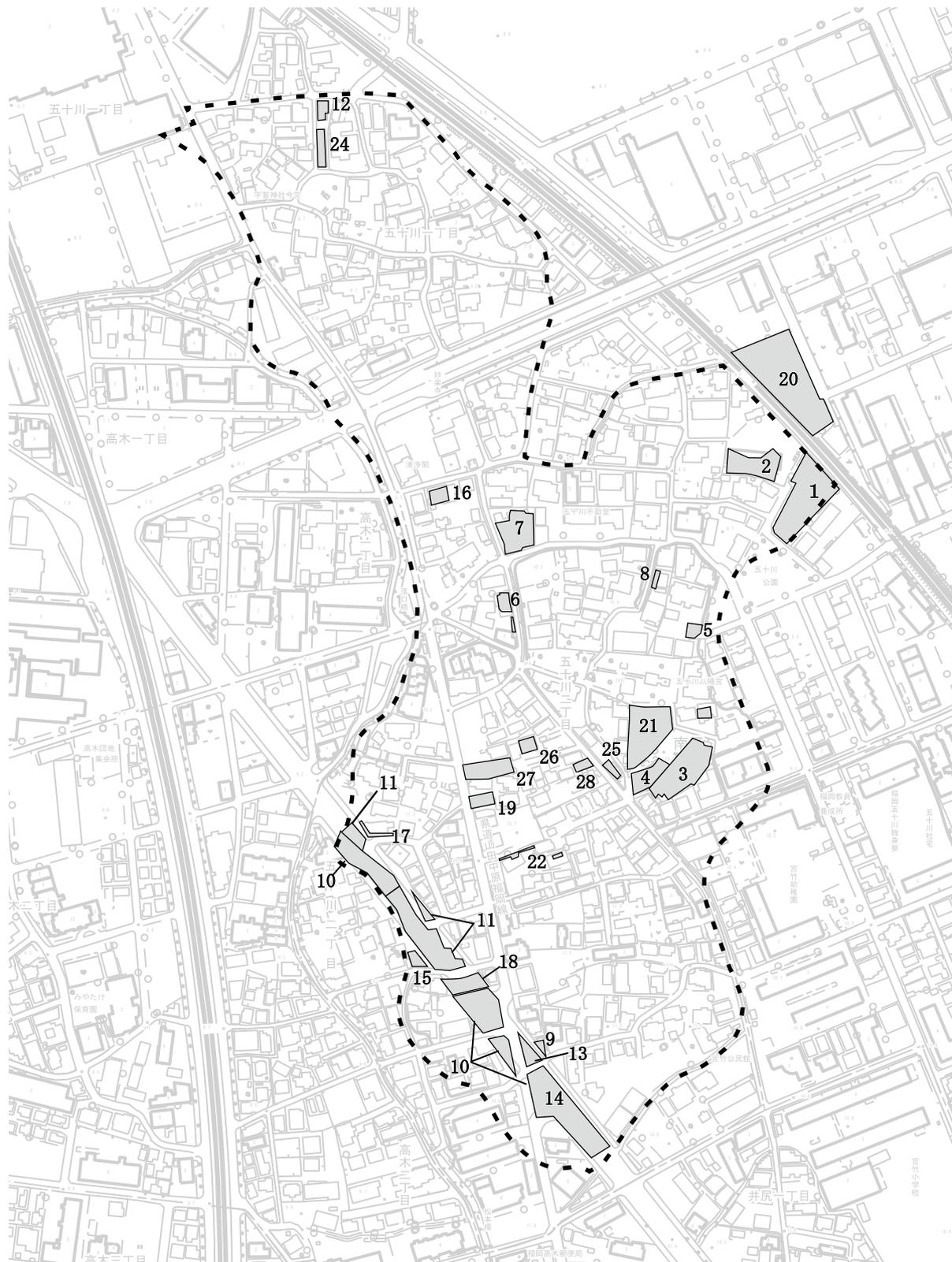
3 遺跡の位置と環境

五十川遺跡は福岡平野を貫流する御笠川と那珂川に挟まれた洪積台地、中位段丘上の北側に位置する。その範囲は南北約 800m、東西約 240m、標高 9～11m 前後をはかる。五十川遺跡が位置する台地はその南東の春日丘陵から標高を下げながら延びる低丘陵上に立地する。周囲は沖積低地に囲まれているが、北端は鞍部を介してさらに台地が広がり、比恵・那珂遺跡群が立地し、南側では狭い谷を挟んだ台地上に井尻 B 遺跡が隣接する。

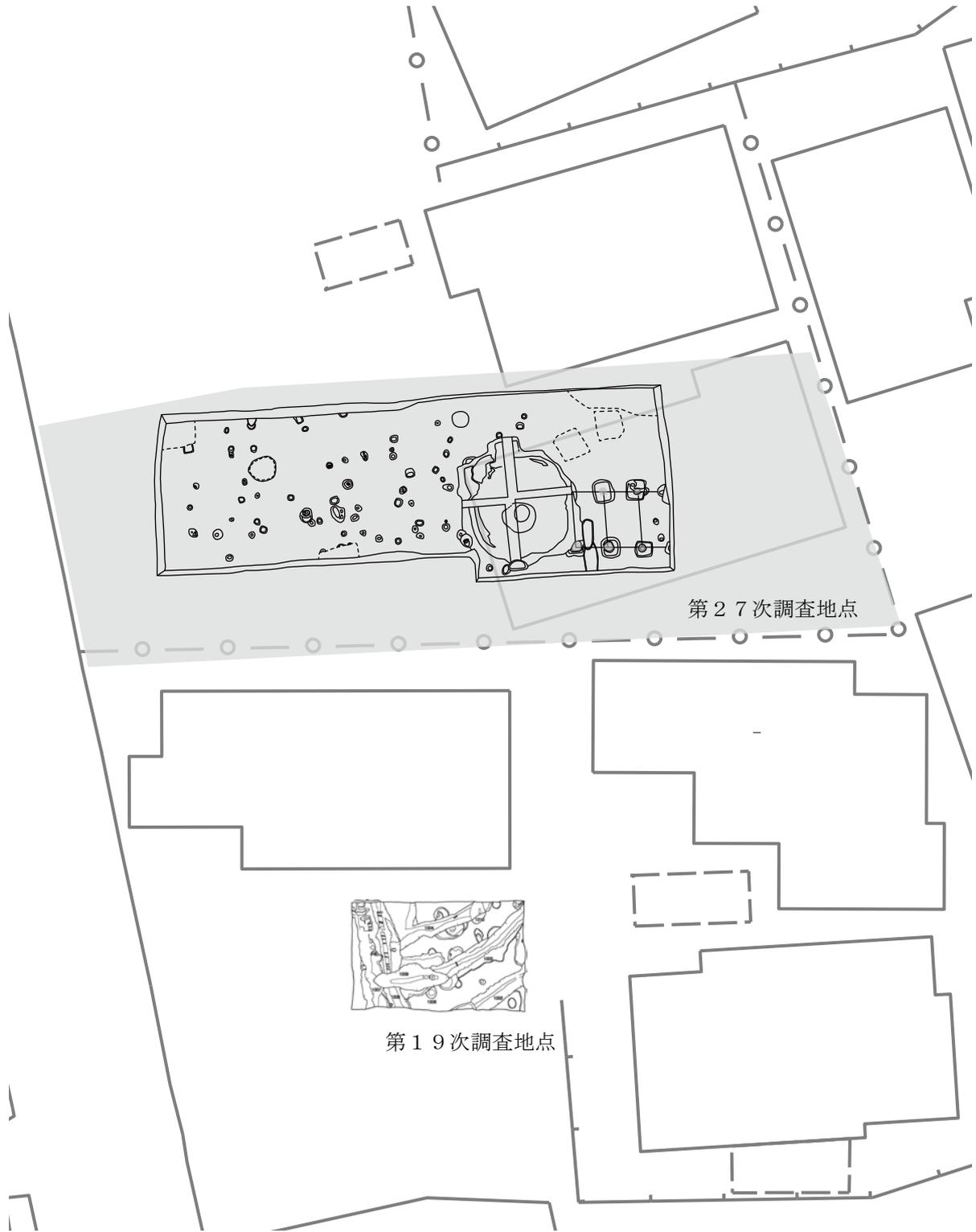
北側の比恵・那珂遺跡群では、水稻耕作の始まりとともにまず台地縁辺部に集落が営まれ、弥生時代中期、古墳時代前期、古代をピークとして遺構が営まれる。特に弥生時代中期には台地中央部に集落が拡大するが、後期に一旦衰え、終末にかけて新たな集落が営まれるようになり、那珂八幡古墳を中心とした墓地エリア、集落エリアの配置が認められる。

南側の井尻 B 遺跡では旧石器時代や弥生時代前期の遺物が台地縁辺部で出土するが、弥生時代後期前半まで遺構・遺物は多くなく、後期後半になって青銅器生産を伴う大規模集落が営まれるようになる。また古代に入り、瓦や「寺」と刻んだ須恵器等が出土していることから、寺院や官衙が存在した可能性がある。

周辺の遺跡の状況を踏まえ、五十川遺跡の変遷をこれまでの調査から概略する（第 2 図）。旧石器時代の遺物は遺跡の南西部でナイフ形石器、原の辻型台形石器、細石刃などが出土している（第 11 次・第 14 次調査）。縄文時代の遺物は打製石鏃などの出土に留まる。弥生時代前期には、南西部（第 10 次・第 11 次調査）と中央東部（第 1 次・第 2 次調査）で前期前葉以降の集落が営まれていたことが分かっている。また第 16 次調査でも溝を確認したが、これらはいずれも低地に面した台地端部に位置している。その後南西部は弥生時代中期前葉まで集落と墓地が継続する。一方で北東部では中期後葉までの土器は出土するが遺構は確認されていない。これらの集落では黒曜石製石器の利用が顕著である。古墳時代に入ると台地上に広く集落と墓地が展開するようになる（第 1～4 次調査、第 10・11・13・14 次調査）。古墳時代中期の遺構・遺物はなく、後期になると再び集落の広がりを示すようになるが希薄である。古代には台地上の各所で溝等の遺構が確認でき、瓦が出土する地点もある。中世前半の遺構は希薄だが、後半になると溝を中心とする遺構が多く見られるようになり、これらは室町期から戦国期の居館に関連する濠と考えられている。

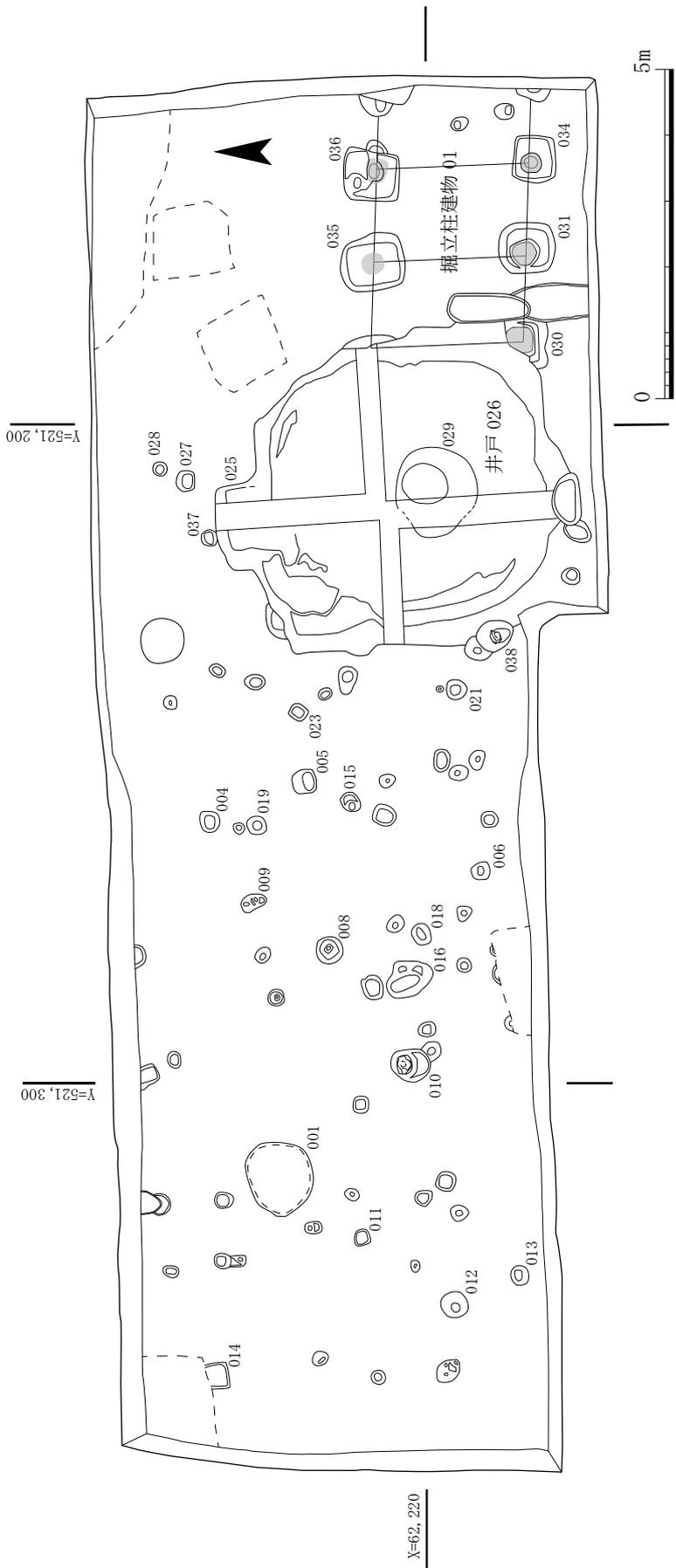


第2図 五十川遺跡調査地点配置図 (1/4,000)



トーン：申請範囲

第3図 五十川遺跡第27次調査地点配置図（1／250）



第4図 五十川遺跡第27次調査地点 全体図 (1/100)

第2章 調査の記録

1 調査の概要

今回報告する五十川遺跡第27次調査は、福岡市南区五十川二丁目286番6の一部に所在する。調査地点は五十川遺跡の中央部からやや南西側に位置する。遺構検出は重機で遺構面上面まで剥ぎ取って実施した。遺構面までは東側でGL-50cm前後、西側でGL-70cm前後であり、東から西へ傾斜している。調査区内の攪乱は少なかったが、遺構面（ローム層）は後世の盛土直下で確認されたことから、当時の生活面から削平されていることがわかる。検出遺構は掘立柱建物1棟、井戸1基その他柱穴、ピット多数である。遺構の分布としては西側に柱穴やピットが多数、東側に掘立柱建物、井戸が確認されている。

発掘調査は令和4年8月15日から着手した。まずは重機で遺構面まで剥ぎ取り、並行して発掘調査器材の搬入などを実施した。廃土置き場を確保するために調査区を2分割して調査を行った。まずは西側1/2をⅠ区として調査を行い、8月24日に終了した。次に土砂を反転させてさらに最後に調査範囲の東側をⅡ区として8月25日から9月21日まで調査を行った。そして27日に発掘調査機材などの搬出を行い、すべての調査が終了した。

2 遺構と遺物

以下、遺構種別ごとに調査検出遺構及び出土遺物について報告する。

(1) 掘立柱建物01 (第5図)

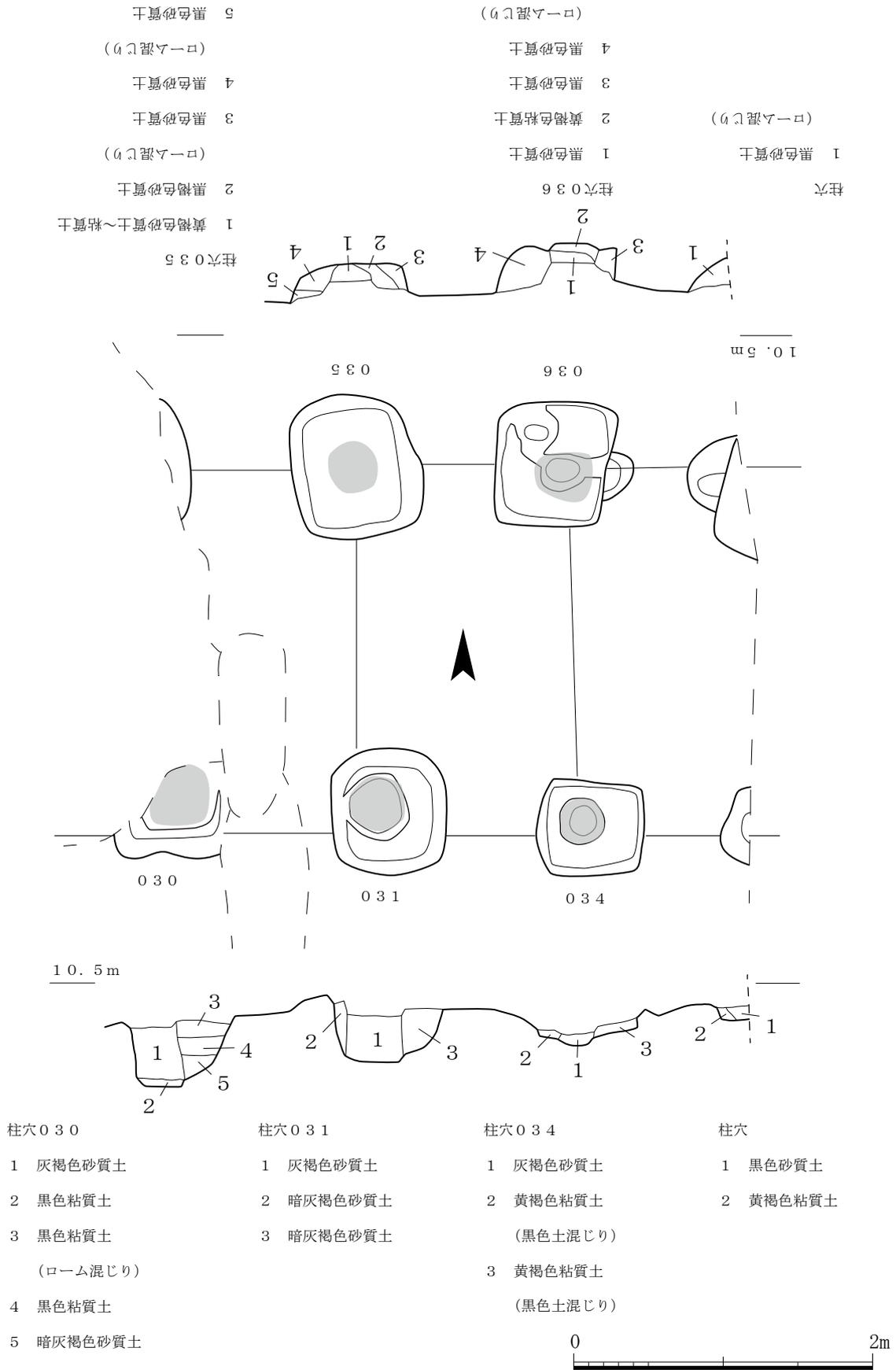
調査区の南東隅で確認された1間×3間の掘立柱建物である。井戸026に切られている。南側と東側の調査区外にさらに延びていると考えられる。主軸方位はおよそ南北方向である。東西は約3.7m、南北は約2.3mをはかる。柱穴の平面形は隅丸方形で、一辺が約80～100cmをはかる。明確な柱痕跡が見られ、柱痕径は約30～40cmをはかる。前述した通り、遺構面は削平されたと考えられ実際の柱穴はさらに深かったと考えられる。

出土遺物 (第6図) 柱穴から弥生土器片、土師器片などが出土したが、実測に耐えうるものは第6図の3点のみである。1は柱穴035の掘方から出土した弥生土器の壺の底部である。復元底径9.4cmをはかる。胎土は4mm以下の石英・長石粒・雲母を多く含んでいる。焼成は不良である。色調は橙色を呈する。調整は外面に薄くヨコハケが見られ、内面に工具痕と思われる痕跡が見られる。ただ全体的に摩滅しており、その他の調整痕は不明である。2は柱穴035の掘方から出土した弥生土器の甕底部である。復元底径は9.0cmをはかる。胎土は3mm以下の石英・長石粒・褐色粒を含んでいる。焼成は不良である。色調は橙色を呈する。底部は平底を呈する。胴部は底部から直線的に延びている。調整は表面が全体的に摩滅しており不明である。3は柱穴031の掘方から出土した円盤状土製品である。土器の底部を打ち欠いて整形している。最大残存長は6.7cm、最大残存幅は7.1cm、最大残存厚さは0.8cmをはかる。胎土は白色微粒子・雲母・赤色粒を含んでいる。焼成はやや軟質である。色調は黄橙色を呈する。表面は全体的に摩滅しており調整痕は不明である。

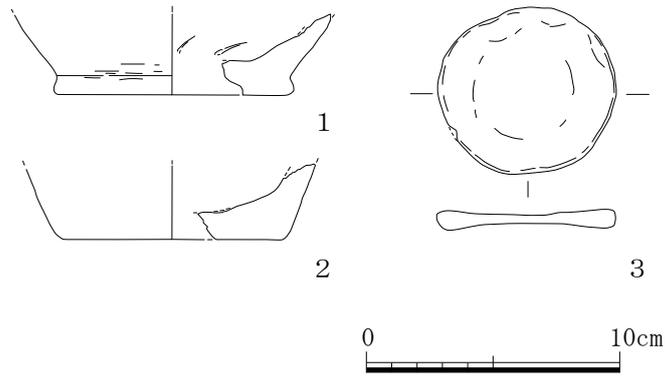
掘立柱建物の時期は出土遺物と切り合い関係から弥生時代から古代の間であると考えられる。

(2) 井戸026 (第7図)

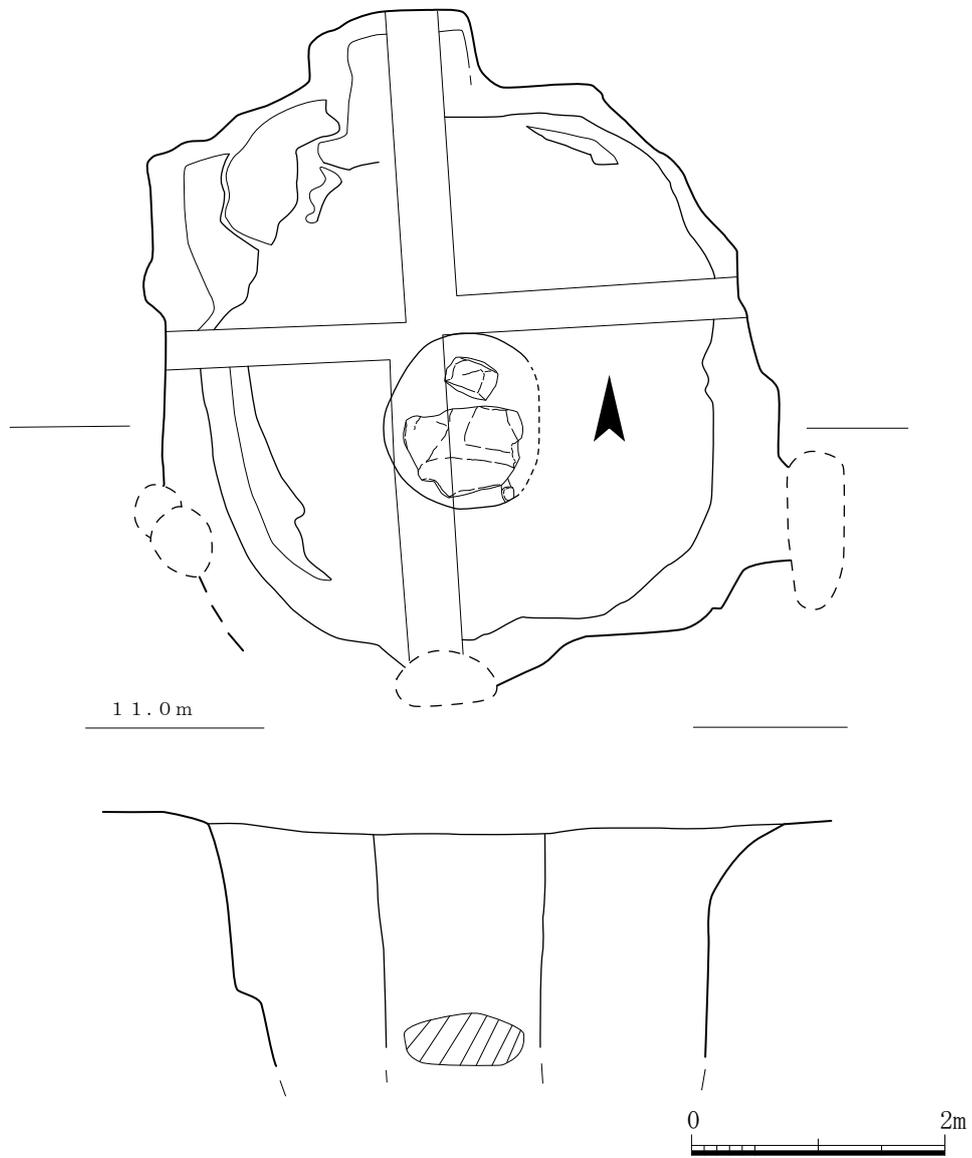
調査区の東側で確認された井戸である。井戸の平面径は不整形である。径は4.5m、深さ2m



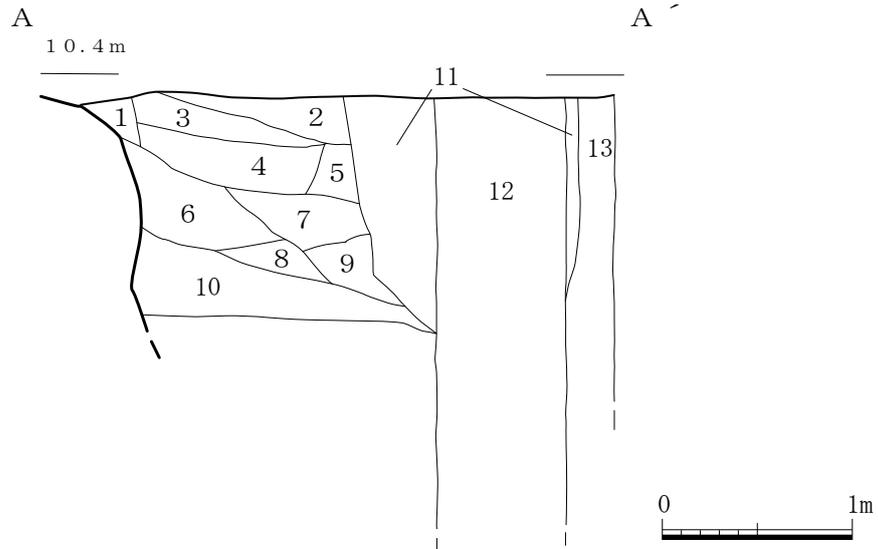
第5図 掘立柱建物01実測図(1/40)



第6図 掘立柱建物01出土遺物実測図(1/3)

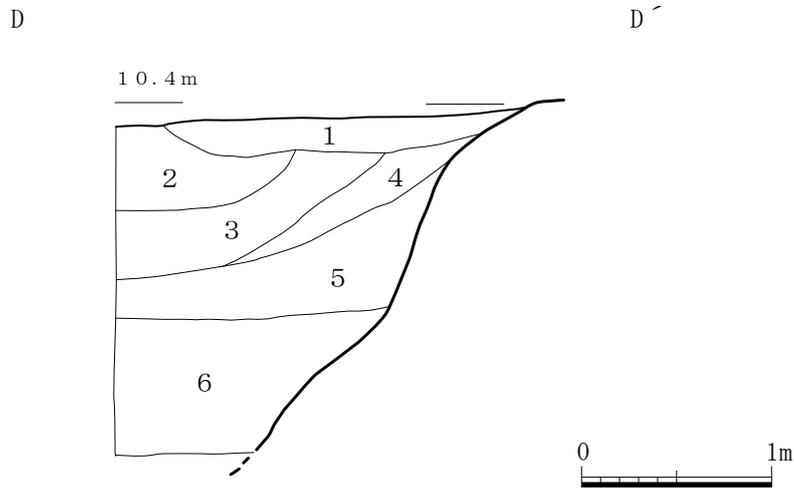


第7図 井戸026実測図(1/60)



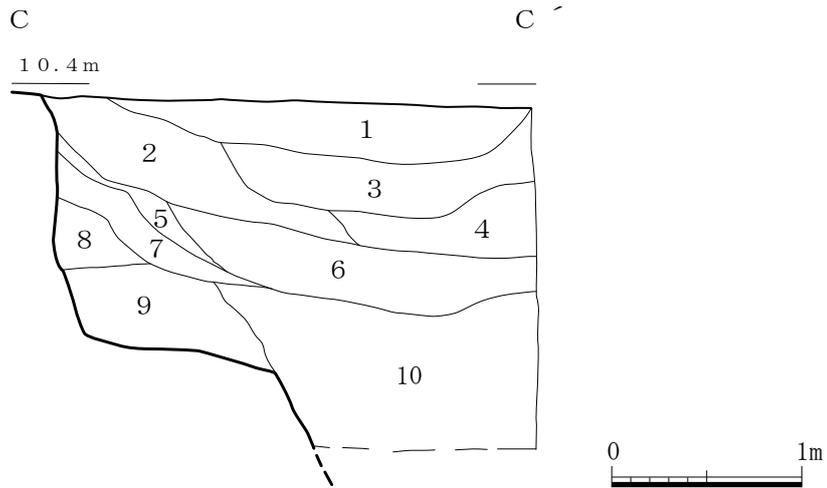
- | | |
|-------------------------------|--------------------------------|
| 1 黒褐色粘質土 | 7 淡褐色砂質土 (白色粘土・ローム混じる) |
| 2 黒褐色粘質土 (ローム粒が若干混じる) | 8 やや明るい淡褐色砂質土 (白色粘土・ローム混じる) |
| 3 淡灰褐色粘質土 (白色粘土・ローム粒混じる) | 9 やや暗い淡褐色砂質土 (白色粘土・ローム混じる) |
| 4 淡褐色粘質土 (白色粘土・砂・ローム粒混じる) | 10 赤褐色粘質土 (白色粘土混じる) 粘性あり、しまり強い |
| 5 淡褐色粘質土 (白色粘土・ローム粒混じる) ややしまる | 11 暗灰褐色砂質土 |
| 6 やや赤みをおびた褐色粘質土 | 12 暗灰褐色砂質土 しまりが非常によわい (井筒) |
| (白色粘土・ローム・黒色土まじる) しまりはややよわい | 13 灰褐色粘質土 (白色粘土・ローム粒を多く混じる) |

第8図 井戸026A-A' 土層断面図 (1/40)



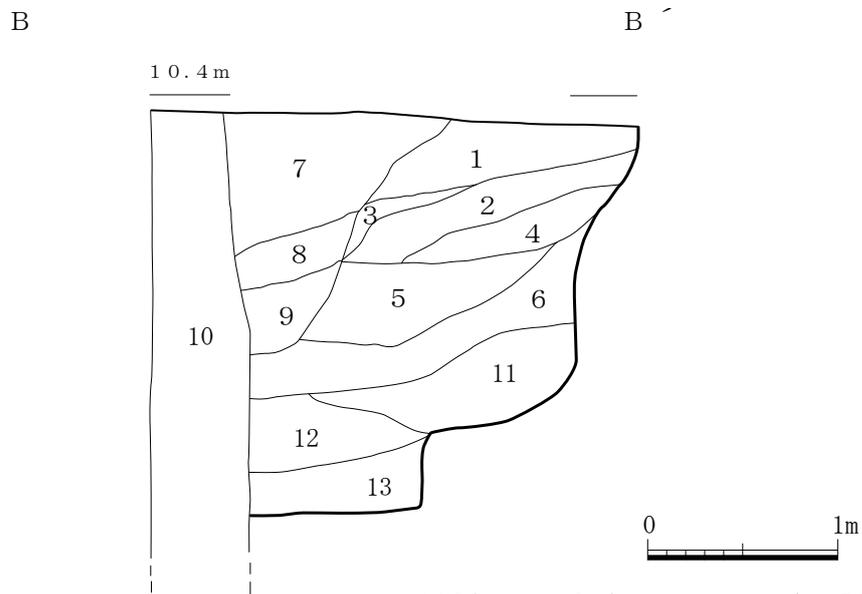
- | |
|----------------------------------|
| 1 黒褐色粘質土 (白色粘土少し混じる) |
| 2 淡黒褐色粘質土 (まだら状に白色粘土・ローム多く含む) |
| 3 灰褐色粘質土 (白色粘土・ローム多く含む) |
| 4 黒褐色粘質土 (ローム粒多く含む) |
| 5 淡灰褐色粘質土 (まだら状に白色粘土・ローム多く含む) |
| 6 淡赤褐色粘質土 (まだら状に白色粘土・ローム非常に多く含む) |

第9図 井戸026D-D' 土層断面図 (1/40)



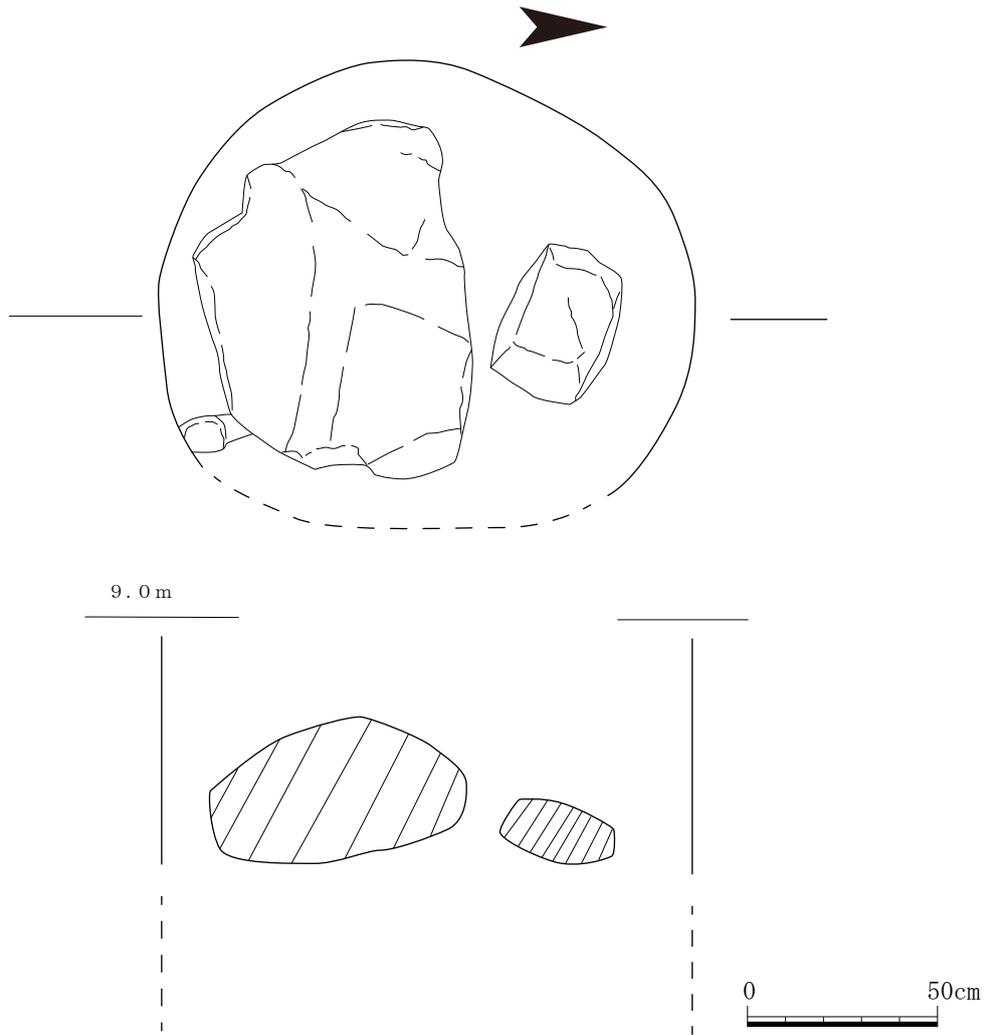
- | | |
|-----------------------------|-------------------------------------|
| 1 黒褐色粘質土（白色粘土・ローム混じる） | 6 淡灰褐色粘質土（まだら状に白色粘土・ローム混じる） |
| 2 黒褐色粘質土（まだら状に白色粘土・ローム混じる） | 7 灰褐色粘質土（細かいローム粒混じる） |
| 3 淡黒褐色粘質土（まだら状に白色粘土・ローム混じる） | 8 灰褐色粘質土（まだら状に白色粘土・ローム混じる） |
| 4 灰褐色粘質土（まだら状に白色粘土・ローム混じる） | 9 やや青味を帯びている暗褐色粘質土
（白色粘土・ローム混じる） |
| 5 黒褐色粘質土（白色粘土・ローム混じる） | 10 淡赤褐色粘質土（まだら状に白色粘土・ローム混じる） |

第10図 井戸026 C-C' 土層断面図（1/40）

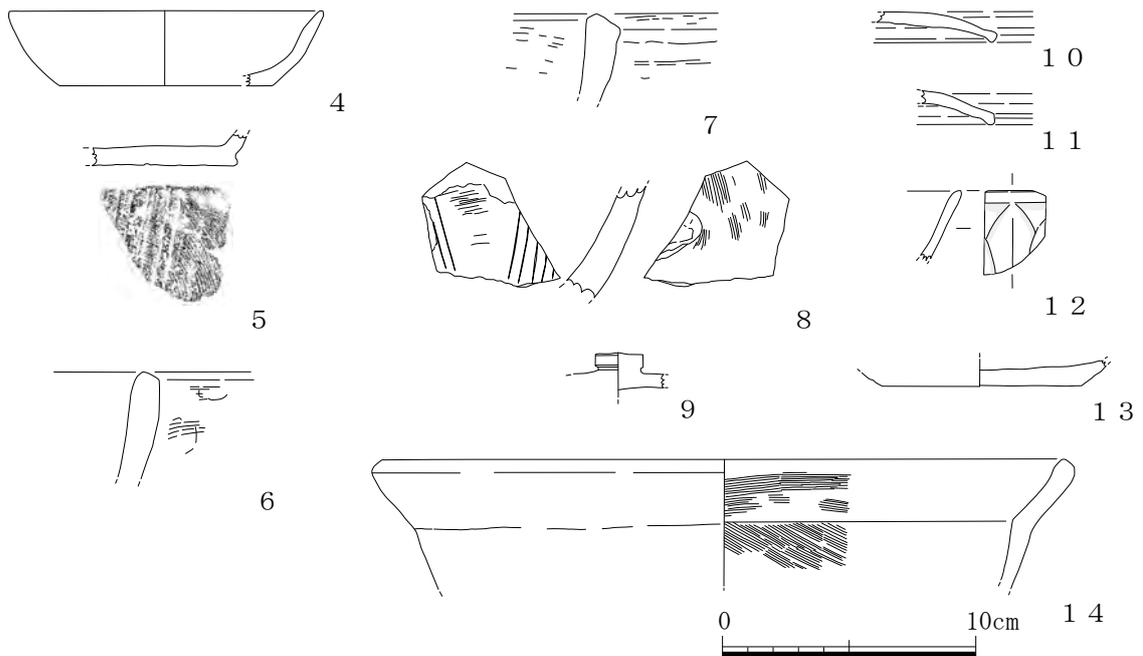


- | | |
|---------------------------|---------------------------|
| 1 灰褐色粘質土（白色粘土・ローム混じる） | 7 暗灰褐色粘質土（白色粘土・ローム粒多く混じる） |
| 2 黒褐色粘質土（白色粘土・ロームブロック混じる） | 8 明暗灰褐色粘質土 |
| 3 明暗褐色粘質土（白色粘土・ローム混じる） | 9 暗褐色粘質土（白色粘土・ローム粒混じる） |
| 4 暗褐色粘質土（白色粘土・ローム混じる） | 10 暗灰褐色砂質土 しまり弱い（井筒） |
| 5 明暗褐色粘質土（白色粘土・ローム混じる） | 11 淡灰褐色粘質土（白色粘土・ローム混じる） |
| 6 暗褐色粘質土（白色粘土・ローム粒混じる） | 12 灰褐色粘質土 |
| | 13 灰褐色粘質土（白色粘土・ローム混じる） |

第11図 井戸026 B-B' 土層断面図（1/40）



第12図 井戸026井筒石材出土状況実測図 (1/20)



第13図 井戸026出土遺物実測図 (1/3)

以上をはかる。遺構検出当初は井戸である認識がなく、住居跡等の遺構の集合体であると考えていた。そのため土層の堆積を遺構と誤認していた箇所もあり、遺構番号を付していたが、井戸であると認識してからは同一遺構として扱っている。検出面から約1.5m掘り下げたところから湧水しはじめた。埋土はローム土がまだらに混じったものが多く、しまりもややある土層も多かった(第8～11図)。

調査期間の時間的な制約や安全上の観点から検出面から約2m下で掘削を止めた。

井戸の中央やや南側に井筒が確認できた。径約1.4mをはかる。埋土は灰褐色砂質土でしまりはゆるく、湿気が強い。掘方と同様に約1.5m下前後から湧水し始める。さらに掘り下げ約2m下になると湧水でほとんど底が見えなくなる。また約2m下で80cm大と40cm大の石材が見つかった(第12図)。石材以下さらに掘削し、土器片も出土したことから井筒の底に据えていた石材ではなく、廃棄した際に投げ込まれたものと推察される。約2.5m下で細かい小石が確認できたことから、その付近が底である可能性がある。ただ湧水と壁の崩落などによりこれ以上の掘削ができなかったため、明確に井筒の底を確認できなかった。

出土遺物(第13図) 井戸の掘方や井筒から土師器・須恵器・青磁などが出土しているが、その多くは小片であり、実測に耐えうるものは多くなかった。4～12は掘方から、13・14は井筒から出土した。4は土師器の坏である。復元口径は12.6cm、器高は3.0cm、復元底径は8.4cmをはかる。胎土は精緻で、3mm以下の橙色粒子を多く、また雲母を少々含んでいる。焼成は軟質である。色調は浅黄橙色を呈する。表面は全体的に摩滅しており、調整痕は不明である。5は土師器の大皿?である。底部のみが残存している。碎片のため反転復元ができなかったため、底径などは不明である。胎土は精緻だが、4mm大の橙色粒子や微粒の雲母、白色粒を含んでいる。焼成はやや軟質である。色調はにぶい橙色を呈する。底部内面はやや摩滅しているが、回転ナデ調整が施されている。底部外面は回転糸切りののち板状圧痕が施されている。6は土師質の鉢である。口縁部のみ残存している小片であるため、口径などの法量は不明である。胎土は白色微粒子を若干含んでいる。焼成は軟質である。色調は灰白色～白色を呈する。口縁部内面は摩滅しており調整痕は不明であるが、外面にはヨコハケと指押さえ痕が見られる。また口縁端部には平坦部を設けている。7も土師質の鉢である。口縁部のみ小片であるため、法量は不明である。胎土は4mm以下の石英・長石粒・雲母を若干含んでいる。焼成は軟質である。色調は断面中心部は黒色を呈し、その周りは浅黄橙色を呈している。表面は摩滅しており荒れているが、内面・外面ともに若干ヨコハケの痕跡が見られる。8は土師質の楯鉢である。胴部のみ残存しており、法量は不明である。胎土は精緻で、白色微粒子と雲母を若干含んでいる。焼成は堅緻である。色調は灰白色を呈している。内面には擦り目が見られ、細かいヨコハケが施されている。外面にも細かいタテハケが施されている。9は須恵器の坏蓋のつまみである。つまみ径は1.9cmをはかる。胎土は黒色・白色微粒子を含んでいる。焼成は堅緻である。色調は白色を呈している。調整はつまみ部分は回転ナデを、胴部内面はナデ調整を施している。10は須恵器の坏蓋である。小片であるため、法量は不明である。口縁端部の立ち上がりが短い。胎土は精緻である。焼成は堅緻である。色調は灰白色を呈している。調整は全体的に回転ナデが施されている。11も須恵器の坏蓋である。小片であるため、法量は不明である。胎土は精緻で、白色微粒子を若干含んでいる。焼成は堅緻である。焼成はやや黒みを帯びた灰白色を呈している。口縁端部の立ち上がりがやや短い。調整は全体的に回転ナデを施している。12は龍泉窯系の青磁碗である。小片であるため、法量は不明である。胎土は精緻である。色調は胎土が灰色を呈し、釉色は灰オリーブを呈している。外面には蓮弁文が施されており、中央には鐫がある。13は土師器の坏である。底部の約3/4が残存している。底径は8.0cmをはかる。胎土は3mm以下の赤色粒・白色粒・雲母を含んでいる。焼成は軟質であ

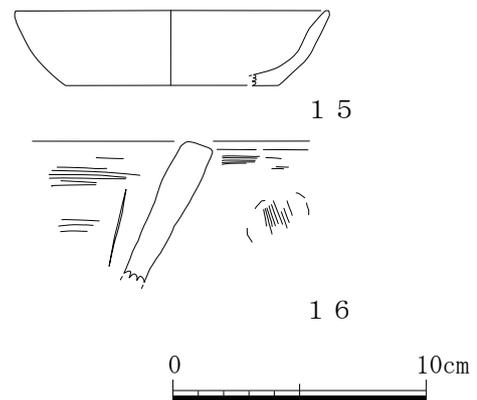
る。色調は橙色を呈している。表面が全体的に摩滅しており、調整痕がわかりづらい。ただ底部は回転糸切り痕のような痕跡が確認できる。14は土師質の鍋である。復元口径は28.0cmをはかる。くびれ部から口縁部にかけてやや内湾している。胎土は3mm以下の石英・長石粒・雲母・赤色粒を含んでいる。焼成は普通である。色調は橙色を呈している。外面にはススが付着している。また内面はくびれ部から口縁部にかけてはヨコハケを、くびれ部以下はナナメハケとヨコハケを施している。またくびれ部以下は焼成の際の痕跡と思われ、表面が黒色に呈している。

井戸026の時期は出土遺物から古代から中世にかけてを考えられる。

(3) その他遺構出土遺物(第14図)

掘立柱建物01と井戸026以外の遺構は柱穴やピットが多数確認している。弥生土器、土師器などが出土しているが、碎片・小片がほとんどであり、実測に耐えうるものが2点しかなかった。

15は001から出土した土師器の坏である。全体の1/3程が残存している。復元口径13.0cm、器高2.6cm、復元底径8.6cmをはかる。胎土は微粒の赤色粒・白色粒子を若干含んでいる。焼成は軟質である。色調は浅黄橙色を呈している。調整は口縁部から胴部は回転ナデである。底部内面は摩滅しており、調整は不明である。底部外面は回転糸切りの痕跡が薄く確認できる。16は016から出土した土師質の播鉢である。口縁部小片のため、法量は不明である。胎土は1mm以下の褐色粒・白色粒を含んでいる。焼成は良好である。色調は灰白色であるが、外面は少し橙色を呈している。口縁端部には平坦面を設けており、外面にヨコハケが確認できる。また胴部にタテハケと指押さへの痕跡も少し確認できる。内面はヨコハケが施している。擦目が一条確認できる。



第14図 その他の遺構出土遺物実測図(1/3)

第3章 まとめ

今回の調査では掘立柱建物1棟と井戸1基、他多数の柱穴とピットを確認できた。掘立柱建物の時期は古代以前であると考えられるが、一部が調査区外に延びているため、全容を把握できていない。柱穴の配置からおそらく総柱建物になると考えられる。井戸は出土遺物から中世と考えられ、掘方は非常に大きい。第21次調査地点では少し時期は異なるが、古墳時代から古代の井戸が見つかっており、素掘りの井戸であった。これらの差異が時期差によるものか、また技術の差なのかは今回検討ができなかった。今後の調査事例を待って改めて考えたい。



1. I区全景 (西から)



2. II区全景 (西から)



1. 掘立柱建物・井戸検出状況
(南西から)

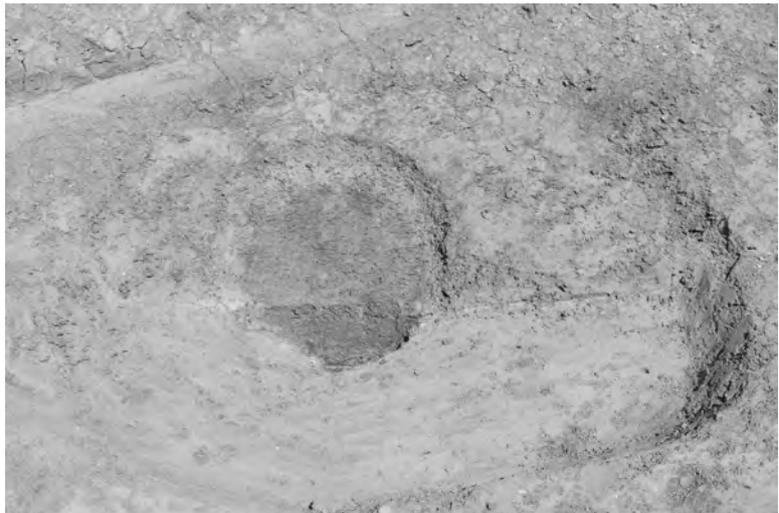


2. 掘立柱建物01全景
(東から)



3. 柱穴031断面
(南から)

1. 柱穴034断面
(南から)



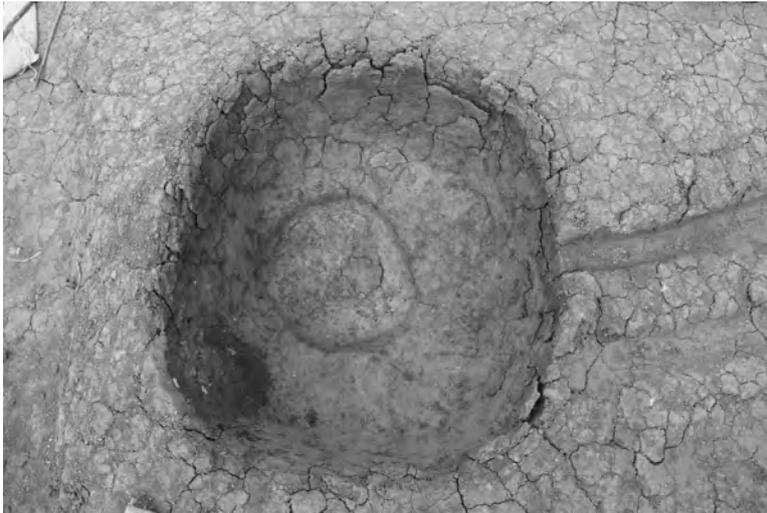
2. 柱穴035断面
(北から)



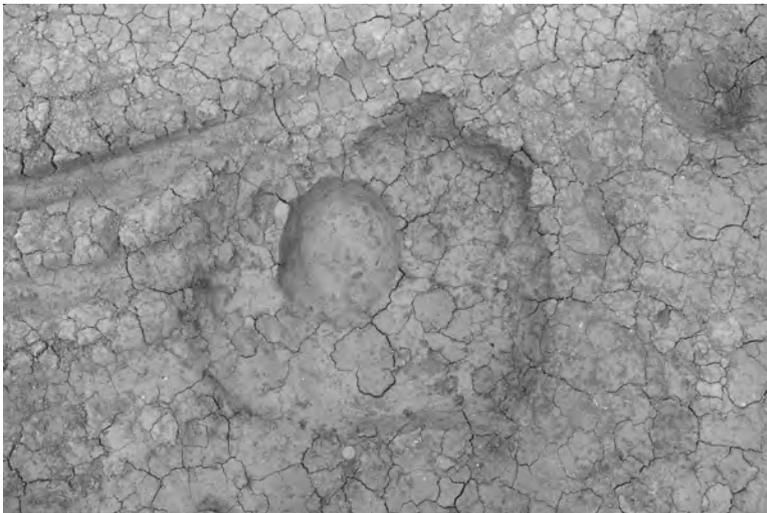
3. 柱穴036断面
(北から)



P L 4



1. 柱穴031完掘
(西から)



2. 柱穴034完掘
(北から)



3. 柱穴035完掘
(北から)

1. 柱穴036完掘
(北から)



2. 井戸026全景
(南から)



3. 井戸026全景
(南西から)



PL6



1. 井戸026 井筒
(南西から)



2. 井戸026 井筒石材検出状況
(南から)



3. 井戸026 A-A
土層断面 (東から)

1. 井戸026 B-B' 土層断面 (南から)



2. 井戸026 C-C' 土層断面 (北西から)



3. 井戸026 D-D' 土層断面 (北から)





1. 弥生土器壺底部 (第6図1)



2. 弥生土器甕底部 (第6図2)



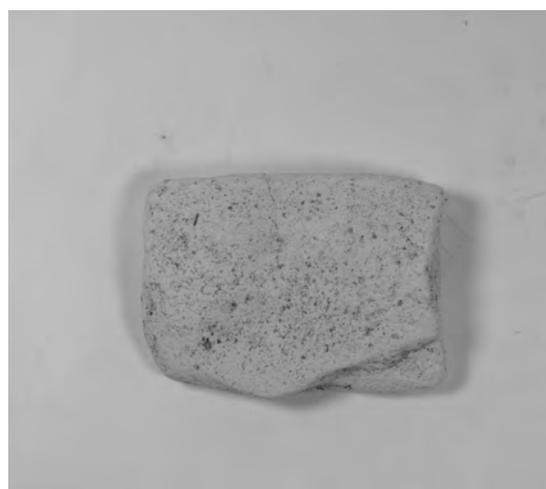
3. 円盤状土製品 (第6図3)



4. 土師器坏 (第13図4)



5. 土師器大皿 (第13図5)



6. 土師質の鉢 (第13図6)



1. 土師質の鉢 (第13図7)



2. 土師質の播鉢 (第13図8)



3. 須恵器坏蓋 (第13図9)



4. 須恵器坏蓋 (第13図10)



5. 須恵器坏蓋 (第13図11)



6. 青磁椀 (第13図12)



1. 土師器坏 (第13図13)



2. 土師質の鍋 (第13図14)



3. 土師器坏 (第14図15)



4. 土師質の播鉢 (第14図16)

報告書抄録								
ふりがな	ごじっかわいせき10							
書名	五十川遺跡10							
副書名	—第27次調査報告—							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1503集							
編著者名	山本晃平							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1丁目8番1号 TEL 092-711-4667							
発行年月日	2024年3月22日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号			(㎡)		
ごじっかわいせき 五十川遺跡	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 みなみくごじっかわ 南区五十川2丁目 289番6の一部	40134	88	33° 33′ 35″	130° 26′ 19″	20220815 ～ 20220927	150	記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
五十川遺跡 第27次調査	集落	弥生時代～中世	掘立柱建物・井戸・柱穴・ピット	弥生土器、須恵器、土師器、土師質土器、陶磁器、土製品	弥生時代から中世にかけての集落跡			
要約	今回の調査地点は五十川遺跡の中央部やや南側に位置する。旧地形は東から西へ傾斜しており、主な遺構は東側から見つかった。 検出遺構は掘立柱建物1棟と井戸1基、他柱穴・ピット多数である。掘立柱建物は古代以前と考えられ、出土遺物は碎片・小片ながら弥生土器・土師器が出土している。井戸は径約4.5mの掘方があり、2m以上ある。井筒内から径80cm程の石材を確認しており、廃棄する際に投げ入れられたものとする。時期は出土遺物から中世である。 今回の調査結果から弥生時代から中世にかけての集落跡が確認できた。							

五十川遺跡10

—五十川遺跡第27次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1503集

2024（令和6）年3月22日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

TEL（092）711-4667

印刷 三栄印刷株式会社

福岡市博多区千代1丁目6番1号

TEL（092）631-3336

